

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00527

研究課題名（和文）18世紀ドイツ語圏多感主義における句読法とその翻訳可能性

研究課題名（英文）Punctuation and its Translatability in 18th-Century German-Speaking Sensibilityism

研究代表者

宮谷 尚実（Miyatani, Naomi）

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：40386503

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、18世紀ドイツ語圏の多感主義における広義の句読法、特に約物（やくもの、Satzzeichen）の機能とその意義を当時の思想や文化との関連で明らかにし、その翻訳可能性を探ることである。18世紀ドイツ語圏で活動したハーマン、ヘルダー、ゲーテの著作を中心に、言語で語り得ない感情や息づかいや沈黙を記す手段としての句読法を手稿段階に遡り、刊行物となるまでの変遷を調査分析した。その結果、多感主義にその源をもつその系譜が明らかになった。また、日本語への翻訳において原文の句読法をいかに反映させるか、その可能性を比較検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音声と文字のはざままで過小評価されてしまう傾向のある句読法や符号にあえて注目し、文字の図像性を手段として文学や著作で表現された感情を浮き彫りにすることを試みた点に本研究の意義がある。日本語に関して句読法は、昭和21年3月に文部省が作成した「『くぎり符号の使い方』（案）」等に記載されたルールが適用されることが一般的であるが、本研究が翻訳可能性の問題に触れたことで句読法への新たな視座が提供できた。またドイツにおける最近の国語教育の影響でドイツ語母語話者にも正書法や句読法の軽視や混乱が多く見られる。本研究を国際的に発信することで、ドイツ語圏における正書法や句読法の再評価につながった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to elucidate the functions and significance of punctuation in 18th-century German-speaking sentimentalism in relation to the thought and culture at the time. The translatability was also explored. Focusing on the writings of J. G. Hamann, J. G. Herder, and Goethe, who worked in the German-speaking area in the 18th century, the study analyzed the transition of various texts from the manuscript stage to the publication. The punctuation is a tool of expressing of emotions, breaths, and silences that can't be pronounced or written in language. As a result, its genealogy with its origin in sentimentalism became clear. In addition, the possibility of how to reflect the punctuation of the original text in the translation into Japanese could be compared and examined.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：句読法 ドイツ文学 言語思想 ハーマン ゲーテ ヘルダー 多感主義

1. 研究開始当初の背景

句読法や約物(符号)の機能に関する研究は国内外で充分とは言えず、開拓の余地が大いにあった。J. G. ハーマン、J. G. ヘルダー、J. W. v. ゲーテなど18世紀ドイツ語圏の著作に関する研究は、各種の全集版に依拠することが国内外問わず常であるが、句読法に関しては版によって誤植や見落としも存在するため、本研究の課題に取り組む必要があった。

2. 研究の目的

18世紀ドイツ語圏の著作に関し、その手稿にまで遡って句読法やその機能を論じた研究は確認できていなかったため、本研究は国内外の18世紀ドイツ語圏文学研究に文献学的根拠をもった新たな視座を提供することを目指した。また、原文の句読法に着目することにより、日本語へ翻訳する際の可能性を探ることも本研究の目的であった。

3. 研究の方法

(1) 研究対象とした著作の句読点や符号の異同を比較検討することで、その意義や思想的背景を浮き彫りにする。可能な限り、さまざまな版を比較し、手稿の初段階まで遡ることによって、表現手段としての句読点や符号の諸相を明らかにする。

(2) 研究対象とした著作の日本語訳を比較検討することによって、(1)で明らかになった表現が翻訳にどのように、あるいはどの程度反映されているか確認する。反映されていない場合にはどのような翻訳可能性があるか検討する。

4. 研究成果

(1) ヨハン・ゲオルク・ハーマンの著作全体を対象とし、句読点や符号の使用方法の変遷を跡づけた。ハーマンが青年時代に執筆者として関わった道徳週刊誌『ダフネ』(1750年)では全体としてコンマ、ピリオド、コロンのみで、疑問文における疑問符以外に補助符号が使われた形跡は見られない。女性の読者を対象とし、敏感な感受性や心の動きを徳にとって重要な要素とする内容ではあるが、文体自体は感情を表現するというよりも冷静かつ論理的である。聖書読解を通じた回心の体験をした時期に執筆された「聖書考察」(1758年)ではダッシュ(Gedankenstrich)が多用されはじめる。ナードラーによる全集はダッシュを1本に統一しているが、バイアー＝ヴァイセンボルの批判校訂版では手稿に基づき、2本の部分は2本と本数も反映させていた。手書きの自伝『我が生涯を想う』(1758/59年)でも、ハーマンが人間の(特に自分の)罪に関する考察に至った瞬間を報告する決定的な箇所にはダッシュが用いられる。さらに下線(校訂版では太字)は、コロンの(:)に導かれた神の言葉の引用部分にあり、声に出して読むとすれば明瞭に、声を大きくしたり速度を落としたりして読むことになる。黙読する場合でも読者は下線が引かれた単語で一瞬立ち止まらざるを得ない。書き手によるいわばアクセントやフォルテ記号とも言える。『聖書考察』や自伝『我が生涯を想う』を「独白の人生から対話的な人生への転換点」ととらえれば、心の振幅や内面の感動がより直截に文体的にも表現されていることが明らかになった。「美学提要」(1762年)では、ダッシュや句読点による修辭的效果が随所に見られる。活字では太字で強調されている語も多い。ハーマンの著作は、たとえば講演のように実際に読み上げるためのテキストではない。だが、それゆえに活字や句読点や符号の視覚的效果を用いて、黙読している際にも音量や間を感じ取れるようなテキストへと発展していったと考えられる。晩年の著作『天翔る書簡』(1786年)に関しては、本研究課題に取り組む直前の2018年に出版された最新の校訂版を用いて、手書き原稿、成立過程の書簡、校正刷への書き込み、と、諸段階を追って調査することでハーマンの句読法への意識や態度が明らかになった。ハーマンの著作の日本語訳は上記著作に関しては「美学提要」しか出版されていない。比較検討の対象は研究論文における引用文を中心とせざるを得なかった。日本で最初のハーマンに関する論文は1935年の栗原兵吾による「ハーマンの菩薩道」で縦書き印刷のものだが、「美学提要」の引用で原文に用いられているダッシュはすべて省略され、全く反映されていなかった。戦後の翻訳を複数比較検討した結果、縦書きか横書きかなど、それぞれの印刷物の条件に合わせて句読点や符号の「翻訳」をする必要性が明らかになった。

(2) ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの著作、特に『言語起源論』(初版1772年)で用いられた各種の補助符号を手がかりとして18世紀ドイツ語圏における句読法の一断面を明らかにした。その際、同時代の言語学者であり近代ドイツ語正書法の整備に貢献したヨハン・クリストフ・アーデルングによる句読法手引に記された符号の種類や使用法を参照することで、当時の句読法をめぐる状況からヘルダーの句読法を読み解いた。ヘルダーの『言語起源論』には自筆稿や清書稿、初版と第2版という諸段階があり、そのプロセスで変更された符号もある。その後の複数の校訂版を比較検討した。アーデルングを参照しつつ『言語起源論』の原稿から初版、そして第2版への変遷を辿った結果、現在広く普及しているレクラム版が句読点や符号を変更するこ

とによってテキストを「平板化」していることが明らかになった。「生き生きとした声」や各種の休止や沈黙を表す符号を駆使したヘルダーの『言語起源論』を日本語に翻訳するのは困難を極める。特にピリオド、コロン、セミコロンの「休止」の大小や、各種ダッシュの訳し分けを日本語の印刷物で再現するのは難しい。これまで出版された翻訳はそれぞれの苦労や工夫の成果である。『言語起源論』初版から 200 周年の 1972 年に出版された 2 種類の日本語訳のうち、大阪大学ドイツ近代文学研究会訳は、「ヘルダー独特の文体に固執するよりも、むしろ日本語としてできる限り読みやすい」翻訳を目指したという。木村直司は、「学術的な論文であるにもかかわらず、修辭的な疑問文や感嘆文に満ちあふれ」ているヘルダーの文章を冷静な日本語に翻訳している。その結果、両者ともたとえば『言語起源論』最後の文の締めくくりは原文のダッシュをなくし、句点(。)に変更している。他の箇所でもダッシュを削除している部分が多い。疑問符や感嘆符も、本稿で引用した部分に関してはすべて句点に変えている。たしかに、文章の意味を理解するという点では補助符号に拘泥するのは読解の妨げという考えもあるだろう。二重ハイフンなど日本語の句読法では通常用いられない符号もある。だが、ヘルダーには独特な句読法なしには理解し難い文が多くあり、18 世紀ドイツ語圏の句読法が文書における「声」の表現と関わることから、日本語の読みやすさを優先するよりも句読法を活かし、可能な限り再現した訳がふさわしいという結論に至った。

(3) ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『若きヴェルターの悩み』におけるダッシュを手がかりとして句読点や符号の意味を明らかにした。初版(1774年)と改訂版(1787年)を比較すると、改訂版においてダッシュの使用回数が顕著に増え、補助符号も多様化している(右表)。またダッシュの機能のヴァリエーションも増えており、名前の省略(伏せ字として) 文の途中での中断(言い淀み) 文と文のあいだの間(休止) 場面転換、話者の交替(引用符を用いない台詞の後) 挿入文の前後、呼びかけの前、強調したい語の前後、の 8 項目に分類した。これら『ヴェルター』におけるダッシュのさまざまな機能を、アーデルング『ドイツ語正書法完全手引』も参照して分析することにより、イギリス多感主義文学からドイツ語圏にも取り入れられたこの補助符号の系譜が明らかになった。

構成	内容	初版 (1774年)	改訂版 (1787年)
前半 第1巻/部	編集者の 前書き	0	0
	ヴェルター の手紙	90	213
後半 第2巻/部	ヴェルター の手紙	105	123
	編集者から 読者へ (引用内)	71 (58)	77 (64)
合計		266	413

【表】『ヴェルター』初版と改訂版のダッシュ使用回数

読み手や聴き手の思考や共感を要求する「沈黙の記号」としてのダッシュを日本語の縦書き文で再現することは容易ではない。音楽と言語の狭間に位置する句読法を日本語への翻訳においていかに反映させるか、複数の翻訳を比較検討し、それぞれの取り組みを提示することで今後にむけた翻訳の課題や可能性を提示した。

さらに、『若きヴェルターの悩み』改訂版(1787年)の手稿(1786年)をヴァイマルのゲーテ・シラー文書館(GSA)で調査した。ゲーテやヨハン・ゴットフリート・ヘルダーらによって手稿に書き込まれた校正指示から、改訂版においてダッシュやセミコロンの使用が顕著に増えた校正指示の痕跡が明らかになった(右表)。ルゼルクによるこの手稿の校訂版(1999年)本文は校正指示をすでに反映した状態であり、句読法上の変更に関しては巻末の注釈でもほぼ言及されていない。句読符号にかかわる校正指示によって改訂版の当初の手稿よりも呼吸や区切りの表現が豊かになった背景には、ヘルダーの深い関与が想定されうることが文書館での閲覧によって確認できた。

校正指示の内容	箇所数
ピリオド(。)の削除	1
アポストロフィ(')の追加	2
括弧(())の追加	6
コンマ(,)の削除	6
ピリオド(。)の追加	11
コロン(:)の追加	18
疑問符(?)の追加	21
コンマ(,)の追加	43
セミコロン(;)の追加	43
感嘆符(!)の追加	44
ダッシュ(—)類の追加	64

【表】改訂版手稿(H)の句読法関連校正指示

以上のことから、多感主義に源をもつ、ハーマンからヘルダーを経てゲーテに至るまでの 18 世紀ドイツ語圏における句読法の系譜とその意義が明らかになった。また、日本語訳においてもその反映の工夫が今後も必要であり、句読法への注目や意識が今後の日本語をさらに豊かにすることが期待できる。

付記

2020 年初頭以来のコロナ禍による移動制限の影響でヨーロッパへの渡航が不可能になったため、現地調査や予定していた研究発表が不可能になり、当初の研究予定の変更が強いられた。また、2020 年度から 2 年間におよぶオンライン授業による物理的・時間的・心理的負担は研究課題への取り組みの甚大な妨げになった。コロナ禍により予算執行も予定通りにできなかったため、本研究は当初の予定よりも 1 年間延長して実施された。補助の延長が許可されたことにこの場を借りて感謝したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 宮谷尚実	4. 巻 56
2. 論文標題 18世紀ドイツ語圏文学における句読法とその翻訳可能性（3）ゲーテのいわゆる『ウェルテル』における句読法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立音楽大学『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20675/00002450	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮谷尚実	4. 巻 55
2. 論文標題 18世紀ドイツ語圏における句読法とその翻訳可能性（2）J. G. ヘルダーにおける句読法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立音楽大学『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20675/00002343	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮谷尚実	4. 巻 54
2. 論文標題 18世紀ドイツ語圏における句読法とその翻訳可能性（1）J. G. ハーマンにおける句読法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立音楽大学『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 175-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮谷尚実	4. 巻 57
2. 論文標題 ゲーテ『若きヴェルターへの悩み』改訂版手稿（1786年）における句読法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国立音楽大学『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 201-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20675/00002565	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Naomi Miyatani
2. 発表標題 Gedanken ueber den Gedankenstrich. Hamanns Interpunktion und ihre Uebersetzungsmoeglichkeiten
3. 学会等名 12. Internationales Hamann-Kolloquium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naomi Miyatani
2. 発表標題 Koenigsberger Kirchenlieder fuer Hamann in London und die Herausforderung einer Uebersetzung
3. 学会等名 13. Internationales Hamann-Kolloquium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Eric Achermann und Janina Reibold (Hg.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Vandenhoeck&Ruprecht Verlage	5. 総ページ数 511
3. 書名 ... sind noch in der Mache. Zur Bedeutung der Rhetorik in Hamanns Schriften. Acta des zwolften Internationalen Hamann-Kolloquiums in Heidelberg 2019	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------